

# 「サムトの婆」再考

——『遠野物語』の初稿考察の一環として——

岩 本 由 輝

- 
- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| 1 サムトの婆とノボトの婆 | 4 佐々木鏡石「館の家」とサムトの婆 |
| 2 寒戸と登戸の関連    | 5 呪われた家にまつわる伝承     |
| 3 考証の深化       |                    |
- 

## 論文要旨

柳田國男の『遠野物語』第8話は、30年前に神隠しに遭って行方不明になっていた若い娘が、ある風の強い日に老いさらばえて帰って来て、また姿を消すという筋であり、寒戸の婆の話としてよく知られている。しかし、遠野市松崎には寒戸という地名はなく、また、柳田がこの話を伝えた佐々木喜善はのちにこの話を松崎の登戸の茂助婆様の話として記していることから、寒戸は柳田の誤記か語感からする創作地名ではないかと考えられるようになって来た。しかるに佐々木は柳田に会うようになる1年半以上も前の1907年3月に刊行された『芸苑』巻第3に「館の家」という短編小説を書いているが、そのなかにサムトの婆を登場させているのである。したがって、本稿では寒戸が柳田の誤記や創作によるものではなく、何かかくされた意味があるのではないかということ、佐々木の「館の家」や最近、遠野市博物館において公開された柳田の『遠野物語』の初稿などを通じて考察しようとしたものである。そして、明らかになったことは、佐々木が「館の家」でえがいたサムトの婆は、『遠野物語』の寒戸の婆のように、老いさらばえながら、生家の人をなつかしがつて1回だけ帰って来たというのとは異なり、血の雨血の風をまきおこしながら、里の子供をさらいに来るとおどろおどろしい存在であったということである。